

横須賀市市街地の発達過程

——旧軍施設の転用に関連して——

木村幸子

横須賀市は、戦前は軍事都市、現在は港湾都市・工業都市として知られている。神奈川県を代表する大都市のひとつと言える。

本市には丘陵が多い。土地造成が行われる前は、市域内の大部分が丘陵であった。本来このような土地に都市はできない。本市が大都市になったのは、明治時代以降集中的に軍施設が設置されたからである。軍施設が拡充されるにつれ、次第に市街地が形成された。

都市形成に不利な土地条件を克服するため、市街地開発の初期から今日に至るまで、様々な努力がなされた。特徴的な開発形態がいくつかあり、本市独特の景観をつくっている。これらの開発形態を通して、本市の市街地の発達をとらえる。

本市の発達を考えるうえでもう一点重要なことは、旧軍施設の転換利用である。戦後軍事都市から平和産業港湾都市に移行する際に、旧軍施設の果たした役割は大きかった。本市の発達と旧軍施設の転用との関係も考察する。

本市が軍事都市として発展し始めた明治時代初期、市街地は谷のわずかな平地に形成された。谷戸集落である。谷に沿って住宅が並び、谷と谷はトンネルでつながっている。この景観は現在でも市北部などで見られる。

埋め立ては明治時代から現在まで行われている。戦前は軍の拡張に伴って埋め立てられることが多かった。戦後は工業・住宅・業務と用途は多岐に渡り、本市の発達に貢献している。平坦地が少ない本市にとって埋立地は貴重である。市域内の丘陵保護の声が高まっている現在、最も注目される土地造成方法である。

丘陵の大規模開発は昭和35年頃、本市が郊外住宅地化するにつれて盛んに行われた。主に住宅地に利用され、本市は人口が急増し、活気付いた。だが、開発により災害や自然破壊が生じた。開発反対運動・住宅不足の解消・不況等が重なり、昭和50年頃には開発は減った。現在は市北部の谷戸

活性化の手段として、開発が行われている。

旧軍施設は終戦直後全て連合軍に接収され、徐々に返還された。昭和20年代前半、まず旧軍官舎が住宅に、軍港が漁港・商業港に転用された。本市は旧軍施設から復興のきっかけを得た。昭和25年旧軍港市転換法が施行された。旧軍施設を本市に有利に利用できるようになり、転用に拍車がかかった。

昭和25年頃は学校・住宅等基本的な都市施設に転用された。戦前は軍施設の拡充に力点がおかれ、都市施設の整備は不十分であった。戦後はこの点から改善された。昭和35年頃高度経済成長期に入ると、工業用地に転用される施設が多くなった。追浜は転用によって工業が発達した。これが工業都市横須賀の形成へつながった。昭和50年頃から、生活の質の向上を求める風潮が現れた。旧軍施設は公園・社会教育施設等、生活をより充実させるための施設に転用されている。

転用は地区ごとに特色がある。工業地区・追浜は工業用地に、住宅地区・衣笠は住民が利用する公共施設に転用される例が多い。

旧軍施設は時代の傾向や地域の特色に合わせて適宜転用され、本市が目指す「平和産業港湾都市」の実現に貢献した。

旧軍施設が自衛隊や米軍の施設に転用される例も多い。戦後なくなると思われた軍事都市の性格が、旧軍施設の転用により存在し続けている。

本市は現在「平和産業港湾都市」建設に向け、様々な計画をたて、実行している。しかし米軍・自衛隊施設があるため、計画どおりに進まないこともある。返還を要求してはいるが、大部分の旧軍施設が返還された現在、残りの施設の返還は相当困難が伴うと思われる。それとも本市は米軍・自衛隊施設の存在を認めたまま、今後発展していくのであろうか。本市の都市づくりはこれからが正念場である。